



鉛筆を使用する教育的効果

◇ 私が生まれて初めてシャープペンシル（通称シャーペン）を目にしたのは、小学校6年生の時でした。その頃はとても高価なものだったシャーペンも、大量に世の中に出回る頃になると、とても安価に手に入れることができるようになりました。

私が教師になった頃には、多くの子どもたちがシャーペンを持っていました。が、「学校では鉛筆を用いること」という決まりがありました。しかし、中学生になってからも、そして大人になってからも、鉛筆を用いる機会は格段に減ります。そこで“小学生に鉛筆を使用させる意図とは何なのだろう？”という疑問を抱いたのです。

◇ まず**筆記用具の歴史**から調べてみました。江戸時代の寺子屋や塾では毛筆でした。その後、明治になって学校制度ができ、最初は「石盤（粘土岩の薄板に木製の枠をつけ、石筆で文字・絵などを書くようにしたもの。布で拭くと消える）」を使うようになったそうです。このように歴史的なことを考えると鉛筆の登場は画期的なことです。準備・片付けが手軽にできて紙に記録していくことができ、しかも間違っ書いたら消しゴムで手軽に消せるようになったのですから。その後、いちいち芯を削る必要のないシャーペンが現れました。ノックをすれば芯が出てくるわけですから、これは便利ですね。瞬く間に需要が広がっていきました。

◇ 担任時代、いろいろな人に話を聞いたり、本などで調べてみたりしました。すると、意外なことが分かってきました。それは、小学生に筆記用具の正しい持ち方を身につけさせることが、思ったほど簡単ではないということです。結論的に言うと、**筆記用具の正しい持ち方・書き方を教えるのに、長さ・太さ・重さ・使いやすさ等の点で鉛筆が優れている**ということです。

ペン（ボールペン、サインペンなどペンと名のつく物）だとどんな**持ち方**をしても、どんな**傾き**でも、またどんなに**力**を入れても書くのに差し支えはありません。シャーペンは力の入れ具合で芯がすぐに折れる、線が細い、薄い等々いろいろ不都合なことがあるのです。そしていわゆるマンガ字や丸っこい字などが書きやすく「正しくきれいに字を書くため」に選ぶ筆記用具とは言えないということなのです。一番のポイントは**筆圧**にあるようです。**鉛筆というのは、芯が折れ（にくく）ないで、しかも読みやすい濃さの字を書くのにほどよい筆圧で書くことが可能な道具だということ**なのです。つまり、ほどよい筆圧で鉛筆を持てれば、「力まず」「姿勢良く」字の練習ができるということではないでしょうか。小学校の低学年では筆圧が弱くてもいいように「B」「2B」くらいの鉛筆を使うわけがここにあったのです。硬筆コントロールで使用するのは「3B」ですね。

◇ 筆圧だけの問題ではなく、鉛筆を正しく持つことができるための指導ということも、奥が深いようです。最近では、字を書くということに関して、目と手の協応動作、指先の微細運動がどのくらいできるのか等の視点からも研究を進めている方がおられるようです。

◇ こうやってみてみると、「たかが鉛筆、されど鉛筆」って感じですね。